NPO 純正律音楽研究会会報　～２０12 年 2 月発行～

ひびきジャーナル

〒106-0031　東京都港区西麻布 2-9-2　Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640　e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日　平成 24 年 2 月 1 日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集　相坂政夫

No.31

昨年は「純正律音楽入門セミナー」11 月 19 日土曜日、12 月 17 日土曜日とも玉木宏樹の体調不良につき中止になり、また「ハープとヴァイオリンの純正律音楽コンサート」11 月 26 日も中止となりました。玉木宏樹は昨年の 11 月 19 日に検査入院をいたしました。12 月 14 日に退院し自宅療養をしておりましたが、本年 1 月 8 日午後 7 時 40 分永眠いたしました。玉木の遺言により、会員の皆様、関係者の方々にはお知らせしないまま、1 月 12 日密葬いたしました。誠に申し訳ございません。残念至極でございます。今後の純正律音楽研究会は、生前玉木が二代目代表として指名されていました水野佐知香さん(洗足音大教授、ヴァイオリニスト)を迎え、純正律音楽研究会を継承して行くことになりました。会員の皆様方とともに、純正律音楽を世界に広め、豊かで安らげる音環境の創出を目指して行きたいと思っております。これからもよろしくお願い申し上げます。

ごあいさつ

NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香
(洗足音楽大学 教授・ヴァイオリニスト)

世界は、すばらしい才能を失いました。
玉木宏樹氏は、作曲家としてだけでなくヴァイオリニストとしても常に時代の先端を走り、私たちはそのすばらしさにいつも驚嘆していました。ライフワークとして純正律を世に広めることにもご尽力され、各方面からも注目されていました。そして、数々の純正律の本、CD等を出版され、世に問うてきました。私とは、2台のヴァイオリンによる楽譜【デュオで楽しむヴァイオリン名曲集】(音楽之友社)など8冊を出版し、CD【夢～くるみ割り人形ほか】等を4枚、また、コンサートなどご一緒させて頂いていました。そして、これからの企画を出版社とも話をしていた矢先でした。

永眠されて一月余りが経ちますが、いまだに信じられなく、日に日に哀しみと悔しさが増しています。

玉木宏樹氏の御遺言で、私が純正律音楽研究会の二代目代表を仰せつかることになり。困惑しております。天から玉木氏が指示をくださることを信じて、微力ながら少しでもお役に立てればと思ってお引き受けしました。皆様のお力をお借りして、研究会の活動を続けていきたいと思います。ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

玉木宏樹氏のご冥福を心よりお祈り申しあげます。
2012 年 2 月 1 日 水野佐知香

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第 27 話

『帰天』

純正律音楽研究会理事
福田六花（ シンガー・ランニング・ドクター ）

玉木宏樹さんが亡くなった。僕の父親（テレビプロデューサー）が玉木さんと仕事をしていたり、自宅が徒歩5分の近所であった関係で、学生の頃から親しくさせて頂いていた。

今から20年ほど前、西麻布の玉木事務所に遊びに行った際、「これを聴いてみてよ。」と云われ、チューニングマシンで純正律と平均律の和音の聴き比べをしたのが、僕が純正律音楽を意識した初めての機会であった。

ちょうどその頃は玉木さんが、純正律音楽の制作および普及活動にのめり込んでいった時期であり、新しい音楽の制作現場や、聴き比べによる脳波測定、純正律コンサートへの出演など、様々なことに関わらせて頂いた20年間であった。

「純正律音楽は身体にイイ！」この確信を得た時期から、僕は玉木さんの作った純正律音楽を、医療の現場で積極的に活用してきた。病院の待合室、理学療法室、胃カメラ検査室などにおいて、患者さんの緊張をどんなクスリよりも有効に解きほぐしてくれた。

今から10年前、僕は外科医から老人介護の医者へとトラバーユした。この老人介護の現場で、純正律音楽は素晴らしい働きをしてくれた。

40名の認知症老人が生活する＜認知症専門棟＞の夜は大変である。夜通し歩き回るヒト（徘徊）。大声をあげて騒いだり暴力をふるうヒト（不穏）。わずか2人の夜勤職員で、朝まで気の抜けない戦いが続く。この認知症専門棟で、就寝前のヒトトキ、純正律音楽のCDをかけたところ、徘徊、不穏になるヒトが激減した。以来純正律音楽は大切な老人介護グッズになった。

「いずれお世話になるからね、、。」と冗談を言いながら、玉木さんは毎年のように介護施設で純正律コンサートを開催してくれた。

68年の人生の間に、普通のヒトの150年分の仕事をして、200年分の酒を飲み、300年分の感動をたくさんのヒトに与えて玉木宏樹さんは帰天した。

合掌

ムッシュ黒木の純正律講座　第 31 時限目

平均律普及の思想的背景について(20)

純正律音楽研究会理事　黒木朋興

20 世紀初頭、文学史の講座とともに文学研究が開始される。この講座の最大の使命は、本来はフィクションで空想の世界の文学を如何に科学の一分野として確立するか、ということにあった。そうであれば、この文学史が作者の伝記的事実に焦点を当てたのは自明なことと言えよう。何故なら、ある小説をどう解釈するかについては人によって様々な解釈が出来、決して一つの解答に同定できないのに対し、作家が何年に生まれ何年にその作品を書いたかなどという事実は科学的に同定できるものだからである。もちろん、前回指摘したようにこの文学史の試みが、フランスという国民国家を彩る英雄として自国の文学者たちを列聖化するという当時勃興したフランス・ナショナリズムと連動していたことは言うまでもない。

同じ時代、ポール・ヴァレリーがコレージュ・ドゥ・フランスで「詩学」の講座を開始する。これは、文学史の講座とは対極的に著者を特権的に扱わない。そうではなく、隠喩、換喩や提喩など文章の修辞の分析をメインに据える。著者に関係なく文書を分析してみようという研究法だとも言えるだろう。『聖書』など作者不詳の文章も少なくないのだから、著者の意図や伝記的事項の探求のみに文学研究を限ってしまえば、それらの作品は研究の対象から外れてしまう。であれば、著者に関係なく文章術そのものを俎上に上げる研究法があっても良いではないか、という発想が出てくるのも当然だろう。

しかし、文学史と詩学は決して敵対関係にあったわけではなく、それこそ車の両輪として 20 世紀以降の文学研究の世界を築き上げていくこととなる。

こうしてレトリック教育から高等教育における文章術教育を引き継いだ文学研究ではあるが、その特徴は対象を文学作品に限定してしまったことにある。こうして、法的言説や政治的言説などといったレトリックが得意としてきた領域が抜け落ちてしまうこととなった。更に、文学研究はその対象を書かれた文章の分析に特化したことにも特徴がある。人前に立ち、身振り手振りを伴わせ、声を出して発言するという行為が置き去りにされてしまったのだ。そもそも政治家の演説も裁判所における法律家の弁論も、レトリックを駆使し、しかも詩句の形で編まれたことを指摘しておこう。聴き手を説得するために、論理的に言説を構築するだけではなく、隠喩や擬人法などを用いて心を揺さぶることが重視されていたのである。そして演説が詩句で書かれたのは、原稿を覚えやすくするためにリズムを整える必要があったからである。もちろん、実際に演説をする際には、覚えた文章を懸命に思い出しながら発話するなどということがあってはならない。まるで即興で文言を思いついたようにすらすらと口に出来なくてはならなかったのだ。

こうして声に出して発話するという雄弁術の技は、文学研究から離れ、演劇教育の領域へと移籍することになる。すなわち、文学研究は文学研究だけに対象を絞り込み、そして書かれた文章を分析することのみに特化して自らの聖域を確立することになったのだ。そこでは、かつて教育の主役であったレトリックは過去の遺物として侮蔑の対象となったのである。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

♪再びカンボジアから♪

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

ひびきジャーナル 26 号と 27 号で「カンボジアの子どもたちに音楽を」というテーマで、カンボジアの歴史や「JHP・学校をつくる会」の教育支援活動と

して、校舎建設、日本から楽器を送っていること、そして現地でどのような音楽教育が行われているかなどについてレポートした。そして、一昨年に続いて昨年末も現地を訪問したので、今回二度目のカンボジアレポートをしょうと思う。

今回のプログラムは、校舎の贈呈式や教員を対象とした音楽のフォローアップトレーニングの見学など、非常に関心のあるものばかりで行く前から大変楽しみであった。

まずはフォローアップトレーニングの見学と音楽交流。トレーニングでは、手拍子や打楽器によるリズム打ち、C-dur のメロディーのドレミ読みの練習、鍵盤ハーモニカの練習などをしていた。鍵盤ハーモニカの練習曲は日本の曲の「とんび」。現地ではまだ楽譜を読める先生、鍵盤楽器が演奏出来る先生が少なく、教員養成の必要性をつくづく感じた。交流では民族音楽などを紹介してくれたが、やはり西洋音楽との音階の違い、音程やリズムの感覚の違いなどを感じた。われわれ日本チームも日本の歌を歌ったり盆踊りまでとびだして、楽しく交流することができた。

カンボジアは鉄道がないので（線路はあるがあまり走ってはいないようだ）どこへ行くにも移動が大変。しかも都市部を離れれば、車の中で体が飛び上がるほどのガタガタ道。校舎の贈呈式は、首都プノンペンから車で約 2 時間のところにあるトームキリ小学校で行われた。中高生によるマーチングバンドが披露された。やはり日本から送られた中古楽器で編成され、完全な編成とはいえないが、トランペット、トロンボーン、アルトサックス、クラリネット、打楽器類と主な楽器はだいたいそろっており、クラシックからラテン音楽まで、ほんのさわりだけではあるがいろいろな曲を演奏してくれた。日本チームからのお返しには、またまた私のアコーディオンが活躍である。JHP が建設する校舎には、たいてい寄贈者やゆかりのある人の名前が壁面に大きく日本語で書かれている。今回は歌手の川嶋あいさんの寄贈による校舎で壁面に書かれた文字は「あい校舎」。（人の名前のほか、夢校舎などと書かれたものもある）

今回、先生たちが一生懸命音楽トレーニングにはげむ様子や、マーチングバンドの演奏などから感じたことは、将来的にはきっと音楽であふれる国になるだろうということである。もともとカンボジア人は大変陽気で、歌や踊りが大好きだ。西洋音楽についてはまだ歩き始めたばかりだから、細かな部分を批評したり指摘したりする段階ではないが、小学校では次第に音楽教育を行う学校

が増えている。日本の童謡などもいくつか知られておりまさに「音楽は国境を越えて」である。前述のプログラムのほかにも、子どもたちと一緒に遊んだり歌ったりする機会もあり、今回も大変充実した 4 日間であった。

CD レビュー純正茶寮

<OatianatO>

純正律音楽研究会理事　黒木朋興

タイトル ：OstinatO
アーティスト ：Philippe Ollivier,Yannick Jory

フランスの西端、ケルト人の地、ブルターニュのアコーディオン／バンドネオン奏者のフィリップ・オリヴィエが、やはりブルターニュのサックス奏者ヤニク・ジョリと出した『OsitinatO』の日本での発売が決定したので、早速宣伝させて頂く。

フィリップはダイアトニック・アコーディオンとバンドネオンを弾く。フィリップと友人になったおかげで、私はダイアトニック・アコーディオンという楽器の仕組みを知ることが出来た。この楽器は、くろまちっく・アコーディオンと違い、12 のキーすべてが使えるわけではない、それどころかかなりの制約がある。また、ハーモニカのように蛇腹を伸ばしたときと畳んだ時で別の音が出るのである。何も、すべてのキーで出来ることが音楽の「進化」ではないのだ。

そのフィリップに、なぜバンドネオンを始めたのかを聞いたところ、アコーディオンではブルターニュ音楽のようなモード音楽をやるのに限界があるから、という答えが返って来た。アコーディオンの場合、左での伴奏用のボタンに既

にドレミなどのトライアドが組み込まれている。３度抜きの和音を作るのが難しいのだ。対して、モードで曲を作るには、５度を中心に和音を組むなど、場合によっては３度を抜く必要がある時がある。いろいろなモード音楽の可能性を考えた場合、バンドネオンを習得する必要があったんだよ、とフィリップは言う。

　世界には、まだ、僕の知らない素敵な音楽があるのだな、と改めて感じた。個人的には５曲目「Tourpakak」がおすすめ。

CDの日本での発売元はAirplane Lableです。
http://www.airplanelabel.com/iphone-ap/news/009.html

連載【純正律音楽と寺垣スピーカー】

純正律音楽研究会　正会員
（株）ABSネットワーク
会長　林 盛良

ヴァイオリンの街クレモナへの旅

　ミラノ・マルペンサ空港に降り立ったのは昨年８月１６日午後。（ミラノにはマルペンサ空港とリナーテ空港の二つの空港があるが、ミラノ市内やクレモナに近いのはリナーテ空港。）まず最初にすべきことはレンタカーの手配である。前日打診して断られた複数のレンタカー事務所を回り再交渉したがどこも希望のオートマ車は出払っていて１台もなかった。一縷の望みを託して最後に回ったH社に小型ではあるがオートマ車が１台見つかったのである！　滞在時間が短いだけに空港から直接クレモナに向かうことのできるレンタカーは本当に有り難かった。マルペンサ空港からは車だと１時間半もあればクレモナまで辿り着けるのでその日のうちに簡単な観光もできる。後で工房の方に聞くと、ミラノからクレモナ行き列車は本数が少なく、遅れたりすることも多いのでその日のうちにクレモナに到着することすら危うい状況だったようだ。ブタペス

ト（ハンガリー）滞在中に急に思い立ち準備もそこそこに出かけるといういつもの旅のパターンだから仕方がない。
　GPS（海外ではナビというよりこの名の方が通じる）を頼りにポー川を眺めながらクレモナにたどり着いた。街に入るとGPSは幾度も工事中の道路に誘導しようとする。地図を持ち合わせていないので勘を働かせて目的地を探すしかない。GPS使用の際には、道路が途中でなくなっていたり、工事中、歩行者専用、一方通行などが反映されてないことが多くいつも苦労するところだ。
ホテルを探し求めてチェックインしようとしたら、（家族で辛うじてツインを２部屋取ってあったが）ファミリールームが用意できるのでいかがかと嬉しい申し出があった。駐車場のこと、インターネットが不調で使用不可能なことなど、イタリア語しか話さないホテルの気さくな女性オーナーがジェスチャーを交えながら詳しく説明してくれた。

ヴァイオリンの街クレモナ

車をパーキングに預けて明るいうちに街を一周りすることにした。ヴァカンスシーズンの夕方でもあり、街には人影が少なく店も閉まっているところが多い。途中で小さなスーパーを見つけ必需品のミネラルウオーター、果物、チーズなどを購入。ここでも我々家族が殆ど病みつきになっているパラグアジャというスペイン産の珍しい果物（日本の白桃とほぼ同じ味で甘く平べったい形状をした夏だけ入手できる果物。安価でとても美味。これまで入手できる街では毎日数個ずつ食べるのが習慣となっていた）を探したが望みは叶わなかった。街には機械音や電気音など不快な音が流れることもなく静かで落ち着いた佇まいを見せていた。ヴァイオリンの名器製作者、アマティ、グアルネリ、ストラディバリなどが暮らし活躍した痕跡が至るところに残る「ヴァイオリンの街」、作曲家モンテヴェルディの生まれた「音楽の街」を当時に思いを馳せながら歩いているだけでも辿り着けた安堵感と幸福感に浸ることができた。当日到着も危うかっただけになおさらだ。真夏だと言うのにさほど暑くもなく爽やかで快適な気候であった。

クレモナはイタリアの北部ロンバルディア州にある人口７万余りの小さな街だが、その歴史は古く幾多の変遷を経て現在に至っている。特に１６世紀頃から

音楽活動の重要都市の一つとなり、アマティ、グアルネリ、ストラディバリなど弦楽器製作の頂点を極める世界的有名な職人を生んだ「ヴァイオリン製造の街」として余りにも有名である。街には今にヴァイオリン製作技術を伝え、リウタイオ（ヴァイオリン職人）を育成するアントニオ・ストラディバリ国際学校がある。そこには技術を学び腕を磨こうと世界中から弦楽器製作を目指す人たちが集まっている。そこで技術を習得し現地で工房を構える人も多い。現在もなお１００近くの工房があり仲間同士で切磋琢磨したり、経験豊富な職人が教えるというより盗み取らせるような方式で匠の技が伝承されているそうだ。街を歩いていると工房やその看板が其処彼処にあるのには驚かされる。クレモナで学んだり、工房を構えている日本人も少なくない。到着後は暗くなるまでストラディバリ広場や煉瓦作りの古い街並みを散策して街の概要を把握し、翌日からの工房見学に備えた。

ヴァイオリン工房訪問

翌日は早朝から、街の規模からは不釣り合いなほど壮大なクレモナ大聖堂、ヴァイオリンの名器や楽器製造に使った道具などが展示されているストラディバリアーノ博物館、N.アマティ、グアルネリ・デル・ジェスやストラディバリなど巨匠たちのヴァイオリンの名器が展示されているコムーネ宮などを駆け足で見て回った他は、今回の3週間ほどの旅で初めて昼食抜きで大半を工房見学にあてた。

リウタイオによれば、クレモナには１か所に多くの楽器が展示され、試奏して選ぶことができる日本の楽器店のような店舗はないそうだ。工房を訪れ試奏して購入することも出来るが日本の楽器店との関係もあるようで価格的には日本と大差はないようだ。アポをとった工房を数件訪れ、工房内の見学をさせていただいたり、リウタイオから説明を聞いたりした。（工房も少人数で運営されていて不在であることも多いので、アポをとるのには訪問時間を相手側とよく相談しながら決めるのが良い。）ヴァイオリン、ヴィオラを嗜む二人の娘はお勧めの製品を何挺か試奏させてもらった。作業場は広めで天井も高くゆったりしているところが多い。殆どの工房は主にヴァイオリン、

ヴィオラ、チェロを製作しているが、多くの完成品が展示してあるわけではない。試奏室を備えた工房もある。どの工房も天井が高いので音響効果も良く綺麗に鳴り響く。

イタリア語しか通じないところは複雑な話になると通訳を介して意思疎通を図ったこともあった。英語が辛うじて通じるところや、以外にもスペイン語が通じるところ、日本人の工房にもお邪魔させていただいた。どこで購入するか迷いながら、最後にアポなしで立ち寄った工房で試奏したヴァイオリン３挺はどれも甲乙付け難いほど素晴らしい音色を奏でていたが、その内の一挺の音色と響きが殊の他俊逸で家族４人の意見が一致。迷わずそれを購入することにした。弓はフランス製とベルギー製が優れているそうだが、そのヴァイオリンに合わせ試奏しながらベルギー製のものを選んだ。帰国後も何度かやり取りして、当社ではこの工房の他複数の工房とヴァイオリンなど弦楽器のお取引をさせていただけることになったので、ご関心のおありの方にはご紹介などお役に立てると思う。御遠慮なく御相談いただきたい。

ヴァイオリンの街クレモナと寺垣スピーカー

ある工房ではとても大きなスピーカーが置いてあるので尋ねたところ自作されたとのこと。何でも工房開設準備作業より先にスピーカーの製作をされたとの話を聞き驚いてしまった。同じ発音原理の当社の取り扱う寺垣スピーカーの話に及び機会があれば聴いて見たいと興味を持たれた。昨年秋、東京で開催中の「弦楽器フェア」のため帰国された際、会場で再会を果たすことができた。だが相手方の時間が取れなくて寺垣スピーカーの試聴は叶わなかった。因みに、2日連続で立ち寄った会場の地下には立派なホールがあり、出展作品によるコンサートが毎日数回行われていて入場者は素晴らしい演奏を無料で聴くことができる。毎年秋に開催されるのでご興味のある方は足を運んで見られては。

別の工房でも寺垣スピーカーの話が出て、大変関心を示され「一度是非聴いて見たい」と仰しゃっていた。社交儀礼的に「聴きたい」と言われる場合もあるが、この方は本気度が高く３ヶ月ほど経った昨年１１月、クレモナから試聴のため寺垣スピーカーの工房と拙宅を訪問された。「ヴァイ

オリンの製作と全く同じ、音も変わらない。生演奏なのに演奏家がいないという不思議な体験。弓の上げ下げなど弓使いまではっきりわかる。自宅でいつでも生演奏が聴けたら夢のような話、ヨーロッパの生活を激変させるのではないだろうか？」と痛く感動され、即座に現地に置くことを決断された。クレモナに寺垣スピーカーが到着後、最初に音出しをされた際、「我々の飼っている犬は、生演奏と勘違いしたのか、いそいそとスピーカーの前に出て行き、いつも私がヴァイオリンを弾くときと同様の遠吠えのような声を出し、歌い始めたから驚きました。動物は我々よりもずっと敏感なのですね」との感想もいただいた。今ではクレモナの工房に寺垣スピーカーが備え付けられていてクレモナを訪れる世界中の人に聴いていただける。ここでは展示会への出展などの宣伝販促活動を通して世界の音楽ファンを魅了することだろう。他の工房や欧州の都市でも同じような動きがでてきているので（電気的に創られたオーディオの音ではなく）本物志向のヨーロッパでは遠からぬ将来大ブレークする予兆を感じとっている。日本でも生演奏やコンサート愛好家である本物志向の女性からも高い評価を受け注目されている商品である。今回のクレモナでは限られた時間の滞在ではあったが得るものが大きかった。今後はクレモナをはじめ欧州との接点が増え益々頻繁に連絡や訪問しなければならなくなりそうである。

ご案内

会員の皆様には、会員特別価格を設定させていただきました。 上位機種についてもご相談させていただきますので、お気軽にお問い合わせください。また、試聴機をお送りすることもできますので、御自宅のオーディオ環境でご試聴いただくことも可能です。
当社はお手頃価格のSP200とSP300については、在庫を確保しておりますので、今ならお待たせすることなく納品させていただけます。なお、万が一生演奏と同じだと感じられなかったり、ご満足いただけない場合は返品も含めご相談させていただきますのでご安心の上お問い合わせください。
オーディオの音ではなく生演奏やコンサートの音楽が聴ける方、気に入った方だけにご利用いただけるのが、私は勿論、製作者にとっても一番嬉しいことです。

純正律音楽研究会会員の皆様には寺垣スピーカーの澄んだ響きの素晴らしさをご堪能頂き、いつまでも健康で心豊かな人生を送っていただきたいと願ってやみません。
寺垣スピーカーに関する詳細は同封のフライヤーおよび当社ホームページ www.absnetwork.jp をご覧ください。ホームページからnetでのご試聴や海外での試聴会の様子などもご覧いただけます。
寺垣スピーカーのお申し込み・お問い合わせは純正律音楽研究会事務局を通してお願いいたします。

純正律を知る前と知ってから

臼井淳一
音楽家、Webデザイナー

白状すると、私は調律やハーモニーにきわめて無頓着なミュージシャンでした。
私は主にヴァイオリンやギターなどの弦楽器を弾くのですが、

1）耳でチューニングするのは苦手で、いつもチューナーでチューニングしていた
2）チューナーを使うときも、なんとなくテキトーに済ませていた
3）それすらも面倒くさく、ろくにチューニングしないで弾くことも多数
4）仮にちゃんとチューニングしたところで、自分の音の高さ（つまり音程）に無頓着
5）音と音がハモっているかに至っては、ほとんど気にしたことすらないと、玉木氏に言わせれば「きわめてけしからん」ミュージシャンだったのです。

そんな私が玉木氏の純正律入門セミナーにお伺いしたのは2011年4月、5月、10月のこと（その前にネットでも1回見ました）。内容こそ毎回同じでしたが、聞くたびに新しい発見がありましたし、ハーモニーは体験しないとわかりません。それまでとは違う音楽の捉え方に魅力と可能性を感じました。

とは言え、私が全面的に純正律という手法を背負えるかと言うとNOです。それを徹底できる根性が私にはないでしょうし、ちょっと汚れているくらいの音楽が、私の好みに思えるからです。しかし、部分部分で効果的に取り入れたい、その発想を忘れることなく生かしていきたいと考えています。

また、狭義の音楽制作に限らず、医療や介護、建築物での環境音、IT機器の効果音などに実用化する方法を模索すると、結果が出るのではと思っています。

ところで私は民俗音楽を好きで、たくさん聞いてきました。また、MIDIやDTM、Pro Toolsなどのデジタル環境での音楽制作に抵抗があって、今まで避けて来ました。

それがなぜなのか、自分でもよくわかっていなかったのですが、その理由が今では少しずつ見え始めたことに、深く感謝しています。

玉木さんとの出会いから･･･

椿友幸
純正律音楽研究会 会員

年が明けて１週間竜の天に昇るが如く玉木さんがこの世を去っていきました。純正律の普及活動の道半ばにして。我々スタッフが玉木さんと出会って６年、鎌倉でのコンサートで、純正律音楽に対するファンの人々の熱狂に鳥肌が立ち、以来一般のホールでのコンサートは勿論、都電での貸しきりコンサート、ペットコンサート、介護老人施設訪問、等々多種多様の処へバイオリン片手に出向き数多くのミニコンサートを開催、共に歩んできました。

昨年から始めた純正律セミナーもやっと軌道に乗ってきた矢先の今回の旅だち・・・・・・・無念の一言です。

玉木さんが永年事務所を構え慣れ親しんだ西麻布、彼が食事をし、お酒を飲み、作曲のため通ったお店の方々の「西麻布がまた寂しくなる」の大合唱、でも彼の純正律のハーモニーは消えることはないと思います。

幸い純正律音楽研究会の方は水野左知香さんが代表の継承を引き受けていただき玉木さんの意志を引き継ぎ活動して参ります。

寒満月 いやしの音の 舞ひのぼり　　三五郎

★一曲ずつのダウンロード販売を開始致しました。

昨年末から一曲 200 円での DL サービスを開始致しております。
アップしてある CD は 7 枚ですが、これから増やしていくつもりです。是非ご利用下さい。

今後のスケジュール

2012 年 3 月 14 日水曜日

【玉木宏樹をしのぶ純正律音楽コンサート】

会場：【ラ リール】（地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩 5 分）
東京都文京区大塚 3-21-14 （Phone：03-3942-2830）

日時：2012 年 3 月 14 日(水曜日) 開場：18 時 開演：18 時 30 分

出演：水野佐知香(ヴァイオリン) ・三宅美子(ハープ)・荒井章乃(ヴァイオリン)

入場料： 3,000 円

ご予約 ：TEL03-3407-3726 FAX03-3797-5640

おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031
東京都港区西麻布２-9-２ NPO 法人 純正律音楽研究会
お電話：０３－３４０７－３７２６ FAX：０３－３７９７－５６４０
e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp
http://just-int.com/
http://www.archi-music.com/tamaki/

平成 24 年 2 月 1 日
発行責任者： NPO 法人 純正律音楽研究会
編集： 相坂政夫